
機動戦士ガンダム ~ソロモンの日々~

やのゆい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム ～ソロモンの日々～

【コード】

N1266M

【作者名】

やのゆい

【あらすじ】

一年戦争後期。

ジオンが誇る難攻不落の宇宙要塞ソロモンに変わったパイロットがいた。

彼女の名はエリーゼ。階級は少尉。愛機はザク。そして、相棒はカメラ。

開戦前は写真に命を賭けるカメラ女子だったが、非凡な才能を持っていた。

それは、3キロ先のターゲットをファインダーに収める能力。

ひよんなことからザクパイロットにスカウトされ、気が付くとエーススナイパーになっていたエリーゼ。そんな異色な彼女に密命が下る。

それは、戦争の行方を左右する暗殺指令。

カメラを愛するパイロットはライフルで未来を写せるか。
ザクスナイパーの激写に刮目せよ。

機動戦士ガンダムの世界を舞台にしたオールドタイプノベルです。
無事に完結しました。

どうぞご覧下さい。

公国のカメラマン（1）（前書き）

機動戦士ガンダムをモチーフにオリジナルストーリーを書いてみました。

あまり、戦争っぽいのは好きじゃないので、キャラクターの方にピントを合わせて書いてます。

だいぶ、普通のガンダムノベルと趣が違うと思いますが、読んでいただければ幸いです。

それではどうぞ。

公国のカメラマン（1）

機動戦士ガンダム ～ソロモンの日々～

『地球からコロニーを解放せよ』

このスローガンを掲げた人たちの集会を撮りに行った帰りだったんだ。

うん。ギレン総帥の演説の帰り。

茶色い服を着た中年二人組に声を掛けられたことで、私の人生は変わってしまったのだよ。

そう、人生設計が180度方向転換！

憲兵のたむろする部屋に連行されたから本当にビックリした。だけど、奴らが欲しかったのは私が撮った写真だったの。

そんで次の日の新聞にその写真がトップで出たんだよ。

知ってるでしょ？ ギレン・ザビが拳を振りかざした写真。去年の五月に私が撮ったの。

え？ 凄い？ へへへ。

あれは謝礼も凄かったんだ。新聞に写真が使われると札束。ポスターになると金塊。念願の500ミリ単焦点レンズを買えたのは嬉しかったわ。

その後も茶色い服を着た男は、私に仕事をくれた。

最初はチャウサジの撮影。ほら、開戦前にいた反体制革命家の男。隠れ家を探すのに骨が折れたわ。3キロ先から撮るのも大変だったけどね。

次はロウ・マウの撮影。で、その次はマウエルの撮影。

ん？ 暗殺された奴ばかりだった？

そうなんだよ。

私をスカウトしたのは軍の諜報部の奴ら。

ターゲットを暗殺するため、殺し屋に渡す写真が欲しかったんだって。

無駄なことするよね。

そいつらがね、酒飲んでる時、宇宙攻撃軍の将校にこんなこと言っただとさ。

「3キロ先からターゲットの写真を撮れる女がいる。スナイパーにどうだ？」って。

勿論、酒飲みの冗談。

けど相手は真面目な将校。本気で受けちゃって次の日、私はソロモン送り。

こうして、ザクスナイパーパイロットのエリーゼ様が生まれたわけさ。

「凄い！ 冗談からエースパイロットが誕生したんですね！？」

「そゆこと」

私専用ザクの整備を監督していると、新しいパートナーが昔話をせがんできたので教えてやった。

華麗なるカメラ少女の、下劣なモビルスーツスナイパーへの転落を。

「カメラマンからスナイパーへ転職だなんて素敵です」

おいおい、カメラマンの方が素敵だろ。

今度のパートナーはミカサ・リエル曹長。私の観測手としては四代目になる。三代目を失った時、話し上手な黒髪美人をマティに希望したら本当にそんな娘が来た。

面接の時に「髪が短い方が好みだ！」と、私の性癖を叫んだら、その場で髪を切り下ろしたので採用した。正真正銘、私の信者らしい。面接から三日目で宇宙攻撃軍に編入。私の観測手になってそろ

そろ二ヶ月になる。

「昨日の出撃で撃破数が八十五機ですよ。全軍で十二位ですよ？」

「……撃破数つてのはパイロットの優劣を競うものじゃないぞ」

ミカサはメモ帳を取り出し何か書き始めた。

「おい、何を書いてんの？」

メモをのぞき込むと『撃破数はパイロットの優劣を競うものじゃない』と書かれてあった。

彼女は優秀な観測手だが、私の言うことをいちいちメモにとる。

私は、装甲板に岩石を貼り付けたザクの上で溜め息をついた。

公国のカメラマン（2）

専用機として四ヶ月前に与えられたザクは強行偵察型。

推進器の出力と光学観測に優れた機体が欲しいと言ったら、マテイは偵察部隊からこいつを引き抜いてきた。

最初に使っていた『ザク？』と比べると、群を抜いて使いやすく、私はすぐに気に入った。

前のはスナイパーライフルに振り回されて、スピードが出なかったのだ。そのため、スリーパー型の狙撃方法を取らなくてはいけなかった。

しかし、このザク強行偵察型は装甲を極限まで削って速さを追求している。偵察と狙撃では目的は違うけど、私の狙撃スタイルにこのザクはピタリと当てはまった。

ちなみに名前は『ライカ』

モビルスーツに名前をつける乙女チックさを知られたくないので、名前は私しか知らない。

ただ残念なのは、名前の可愛らしさと外見が似つかないことだ。ゴーレムという名前だったら、老若男女の誰でも納得してくれるだろう。この機体には、全身のいたるところに岩石を貼っているのだ。いや、岩石だけでなくシャトルの破片や、コロニーから流れてきた鍋やフライパンもくっついている。

無論、狙撃ポイントで敵に見つからないようにするためだ。

機体色もオ리지ナルのディープブルーから、ニュートラルグレイに塗り替えている。

機体が納品された時、マティが好きな色でマーキングしても良いと言ったので、私は灰色に塗ってもらった。徹底的に機体をカモフラージュしようと決めていたので、灰色だと都合が良かったのだ。結果、古代神話に出てくるような石像のできあがりというわけだ。

脳みそが愛機との馴れ初めを思い出したら、不覚にも岩石の貼り付けを二代目の観測手に手伝わせたことを思い出してしまった。

「……今日の失敗『その1』だな」

「なんですか先輩？」

「なんでもない」

私は『今日の失敗』が『その3』になると死んでしまつと信じている。子供の時から。

「先輩がカメラマンなら、わたしの前職は何だと思えます？」

私はとっさに履歴書を思い出す。

「メガネ屋だろ？」

ミカサの履歴書には、光学機器会社メガロネックスからの志願募集で、軍に入隊したと記載されていたはずだ。メガネ屋つてのはメガロネックスの通称である。

ジオンの大手メーカーで、ザクのモノアイもここのパーツが使われている。

「半分正解です。なんと兼業で女優をしていたのです！」

「へえ？」

顔だけは綺麗だから銀幕に映えるかも知れない。

「……コロニーの君へ」

ミカサが可憐な声で呟いた。

「何それ？」

「わたしが主演で出てた名作映画ですよ。知らないんですか？」
知らない。

ずっと、カメラばかりいじってきたから、流行の映画なんて知らない。愛だの恋だの写真に写らないものは、興味の対象外だ。

「では、映画の冒頭よりご説明いたします。それは、とあるコロニーでのお話です。若き将校ミハエルは休暇を利用して湖の周遊道路をカートで走っていました。そこで、泳いでいる少女に気を取られて横転。あ、その少女がわたしです。ちなみに裸。そして、ここでわたしの台詞です。

『おにいちゃん、大丈夫？』

声を掛けられたミハエルは驚きました。

『か、かわいい……………』

一目惚れしたミハエルは……………」

「レビューせんでもいい」

映画のシーンを再現するミカサを停めた。格納庫の照明を浴び、ほおっておくと全話完全再現しそうな勢いだった。

「ところでミカサ、お前って酒は飲めるっけ？」

「はいー。大好きです」

私は制服のポケットから、誰もが喜ぶカードを取り出した。

「士官用の配給カードだ。くれてやる。飲んでこい」

「ええ?? いいんですか?! って先輩は?」

「整備の連中と話があるんだ。演習も近いし、連邦の動きも活発化している。今のうちに楽しんでこい。今日は解散。明日はマルキユ

ウヒトマルに集合」

わざとらしく大げさな敬礼をしてやる。

自称女優は返礼をして、笑顔でソロモンの第7ブロックにある娯楽施設へ跳んでいった。

本当は整備士に用事はない。

私の『もう一つの仕事』に彼女は必要ないので、呑みに行ってもらったのだ。

愛機が収まる格納庫を後にする。

「エリーゼ少尉、次の出撃も頑張ってくださいよー!!」

整備のコモンズが、シャッターをくぐる私に手を振った。

天然パーマのクリクリ少年だ。

「キルマーク増やしてやるから期待してくれ」

「ハイ！」

キルマークなど描く趣味は持っていないが、この少年兵が描かせて欲しいと志願したので許可した。岩を貼り付けていない右腕内側に描かせている。

この少年は三十個くらい描いただろうか。

その間に『ひよっこ』だった彼が、整備班のメインで活躍しているのだから、時の流れは恐ろしい。整備主任に言わせると、コモンズ少年の成長は、時間よりも私の撃墜数が貢献しているという。もしそうなら嬉しい。

不毛な人殺しが人の役に立っているのだから。

私の『もう一つの仕事』も、人の役に立てば嬉しいと思う。

公国のカメラマン(2) (後書き)

ザクスナイパーが好きの方、是非感想を。
作者の燃料になります。

公国のカメラマン(3)

時刻は十九時。

規則で三時間の外出しか認められていない。士官服から私服に着替えたり、上官へ挨拶をしたりして、三十分も使ってしまった。残りには二時間三十分。ギリギリの時間だ。

部隊と市民の共同区画を仕切るゲートで、外出届に記入する。私の名前の上には、ミカサの名前があった。早く酒場に行きたいのか、殴り書きされていた。

「少尉、ごちそうになります」

顔見知りの守衛がビールジョッキを飲む仕草をした。どうやらミカサが誘ったらしい。私の与えた士官用カードを使えば、ダイナーで三杯までアルコールを注文できるのだ。

「絶対に内緒ですよ？」

守衛の兵士はスタンプの時刻を一時間進めた。

「いいのか？」

小声で「少尉殿は我が隊の女神ですから」と言っ、外出届の時刻をスタンプした。

どうやらパートナーのミカサに感謝しなくてはならないようだ。

おかげで貴重な時間を手に入れられた。

夜のソロモン市街地を急ぐ。

小天体に手を加えて建造されたソロモン要塞。

要塞と言っても、内部はコロニーと変わらない。

いや、それ以上に市街地は住み心地が良くできている。酒を出す

店は十五軒。カフェは三十軒、大型百貨店は二軒。女の子だけいる店もたくさんある。

要塞司令の気質もあって、歓楽街の質はジオン本国より上だ。そして、本物の地面の上に立てるのも魅力の一つだ。

街灯に照らされる非番の兵士と家族の団らんをすり抜け、私は目的の場所へと進む。

5バランチのA地区。

市街地外れのこのブロックは、街灯もまばらで薄暗い。ここらは民間人の住む複合住宅のエリアだ。

その二階。指定された部屋を確認し、ノックする。

ノックを五回。

「お留守ですかー？」

すると背後のドアが開かれ、中年女性が怒鳴るような口調で注意をした。

「そのオッサンは出かけてるよ。」

「アーレンドルフの家に行ったんですか？」

「散歩に行っただけだ。うちで待つかい？」

「ありがとうございます」

私は中年女性の好意を受けた。

迎え入れられた部屋のソファへ腰を下ろす。すでにコーヒーが二つ置かれていた。

「あんたみたいな若い娘が実行役とはねえ。おどろいたよ」
私も、小太りのおばさんが元締めだとは思ってなかった。
ここが目的の場所だ。

指定された面倒な連絡法をパスして、相手がおばさんと張り合

いがない。できることなら格好の良いおじさんがよかった。

「はじめまして。エリーゼと申します。階級は少尉。ザクのパイロットをしています」

「あたしはモーリア。地球連邦軍情報中佐だ。」

反射的に敬礼をしてみました。敵軍とはいえ相手は中佐。私のような軍隊スカウト組でも、ここまで階級に差があると緊張してしまう。

ここは連邦軍シンパの拠点。飲み屋で知り合った男から聞き出して、ようやく来ることができた。

「まさか、こんなところで地球連邦軍の高級将校とお会いするとは思いませんでした」

「私には、こんなおばさんが中佐なので驚いているように思えますがね。コーヒーをどうぞ」

七割は凶星だが、偉ぶっていない人柄は気に入った。

コーヒーは布漉しのようだ。悪くない。

「中佐、話し合いを始めましょう。まず報酬を下さい」

「ほほほ。解りやすいお嬢さんだこと」

おばさん中佐は、指からは指輪を外した。金をベースにしたエメラルドのアクセサリー。

「……あら……星つきですね」

「スターエメラルドよ」

地球連邦軍の諜報機関とはいえ、ソロモンに大金を持ち込むことは叶わない。

そのため民間人の協力者を使って稀少な宝石を持ち込み、買収工作に使うのだ。だが、時価にして地球に家が持てるような宝石が報酬だとは思わなかった。

潤沢な資金。

ジオンが連邦にケンカを売った愚かさは、この宝石を見ただけでも明らかだ。

私は、それほど豊かではない胸に宝石を押し込んだ。

「けど、お嬢さん……本当にやれるの？」

私は胸の谷間に落ちた宝石の感触を楽しみながら、おばさんの懸念に答えてやる。

「私はソロモン最強のスナイパーです。対象が誰であっても完遂しますわ」

「そうね。能力に懸念はないわね。それは私たちがよく知っている。あなたのような兵士がこっちにいてくれれば、戦争はもっと早く終わるのに」

地球では連邦軍が攻勢に転じている。すでに戦後処理を進めている噂は本当のようだ。

「仕事が終わったら、そちらの軍に転向しようかしら。雇ってくれたらですけど」

「銀星勲章でお迎えするわ。だから頑張ってるね。それとあなたの協力者を紹介するわ。出ていらっしやい」

私が腰掛けるソファの真下から、男の首がニュツと飛び出した。

「……連邦軍の男は、ふくらはぎが好きなのかしら？」

「この男は通称ヘビ。特Aの潜入作業員よ。あなたの仕事をサポートしてくれるわ」

あだ名の如く、爬虫類じみた顔の男だ。スキンヘッドで眉毛も剃っている。

「よろしく。ヘビ。そこそこ期待しているわ」

「あんたか？ ミネバちゃんを殺るって酔狂な女は」

私がここへ来た目的は、連邦軍の暗殺計画への荷担。

ターゲットは宇宙で一番有名な赤ん坊。ミネバ・ザビ。

ドズル司令の娘。

連邦には連邦の思惑、そして私には私の思惑があつて、計画は画策され準備が進んでいる。

公国のカメラマン(3) (後書き)

ミネバ様が狙われてる……だと？

狙う奴はクワトロ氏だけで十分だと思っ方は、是非感想を。

次回、機動戦士ガンダム〜ソロモンの日々〜

『連邦の工作員』

君は撮り尽くせるか(キャッチコピー)

公園のカメラマン(4)

雨が降ってきた。

アパートメントの窓を、ポツリポツリと雨の雫が打ち付ける。

「今日は夜間降雨が予定されていたわね。こちらの要塞は自然でいいわ。ルナツィとは大違い」

「本物の自然には敵わないですよ」

おばさん中佐は、観葉植物を窓の外へ出した。地球では雨が勝手に降るといふ。

だから、天気『予定』ではなく、いつ降るか分からないから天気『予報』なのだそうだ。

我々、スペースノイドの憧れが、雨一つにもある。

「エリーゼちゃんよう。傘は持っているのかイ？」

「通り雨の設定だから、すぐに止むはずよ」

「ストッキングは脱いで出た方がいいな。濡れると気持ちが悪い」
親切心なのか、性癖なのか分からない助言がされる。私はストッキングをくれてやった。ニヤリと笑って懐に収める『へび』。
気持ち悪い。

私は席を立った。

報酬受け取りと、情報の擦り合わせ、そして協力者の紹介でおばさん中佐との面談は終了した。細かい打ち合わせに時間を取られて、部屋には二時間も滞在してしまった。

「では、ごきげんよう。エリーゼ少尉。期待しているわ」

「亡命の件、よろしく」

逃げるように連邦のアジトを抜け、通りへ出ると後ろめたさに目

眩がした。

気分はすぐ、元に戻るはずだが。

雨は、予定通りの霧雨で髪が濡れる程度だった。

作業員に言われた通り、生足になったのは不正解だった。

市街に戻ると、街の様相は家族連れの通行人から酔っぱらいへと変わっていた。九時を過ぎると民間人の外出が制限されるためだ。

酔っぱらいには、この小雨が酔い冷ましに丁度いいだろう。

「エリーゼ少尉、奇遇だな！」

肩に手を置かれて呼び止められた。

突然だったので、ギョツとしてしまった。動揺を気がつかれなかっただろうか。

振り返ると、見たことのない将校が立っていた。

階級は少佐で金髪の青年。ハンサムな男だが見覚えのない顔だ。連邦とコンタクトを取ったばかりなので、鼓動が早くなった。

「失礼、どこかであったことがありますか？」

女スパイパーはソロモンでは有名人だ。私が知らなくても、向こうが知っていることも多い。この男もその一人だろう。それとも、連邦との接触に関するのだろうか。

将校は誠実そうな顔を急に歪め、ペロリと舌を出した。

「先程、お会いしたばかりなのにそりゃあねえぜ。ほら、酒だ。この時間にシラフで歩いてちゃ怪しまれるぜ？」

「ありがとう。少佐」

投げられたビールを受け取り煽る。

懸念は不要だった。

声を掛けてきたのは、別れたばかりの男だった。ヘビと呼ばれる潜入作業員。スキンヘッドで爬虫類顔の印象が優先していたから解らなかった。

いや、解らないように化けている。

さつき会ったばかりにも関わらず、人相をきちんと記憶できないのは、能力を持った人間だからだろう。

「見たところ、まだ仕事に慣れていないようだが」

へビは将校の役で、私を探る。

「はい。こんなに大きな仕事は初めてなのです。狙撃は得意なのですが、それ以外はどうも馴染めなくて。私が本国からのスカウト組というのはご存じですか？」

「うわさ話としては知っている。アマのカメラマンから軍に入ったという経歴は有名だ。ギレン閣下の写真を撮ったという話も聞いたことがある」

さすが連邦軍。私の取るに足りない出身もよく知っている。

「志願兵たちと違って、未だに軍隊生活にとけ込めないんです。それなのに、少尉なんて身分はおかしいですよ。ところで、少佐はこれからどちらへ？」

「隊へ戻るつもりだ。部下も遊ばせてやりたい」

「ゲートまで一緒にしますわ」

妙な道連れが出来てしまった。無論、無意味に工員が接触しているはずはない。ここはへビに合わせる必要があるだろう。

先程の打ち合わせで決行予定日は明後日になった。

二日後、司令の妻とミネバが月面都市グラナダから戻ってくる。

それが、私の宙域訓練と偶然重なるのだ。

へビも早速、それに備えて動き出したのだろう。

ピンク色のネオン街を横目に中央通りを歩く。しばらく進むと馴染みの酒場が見えてきた。

「よく、あの店で見かけるが……旨い店なのか？ エリーゼ少尉」

「ソーセージが美味しいです。自家製だそうです。マスタードも秘伝

のレシピで作っていると聞きます。それにしてもよくご存じですね。私がああの店の常連なんて」

へビは私の行動まで知っているようだ。

まあ、今回の作戦は重大に違いないから、私がアプローチしてから、素行調査していたに違いない。

「このブロックは小官の縄張りなのでな。それはそうと、あれは君のパートナーじゃないのかね？」

彼が指差す店の奥に、私のパートナーがへべレケになって介抱されていた。

ミカサ……なんてみっともない。

私はソーセージの旨い店『アーレンベルグ』に踏み込んだ。

「ミカサ、何酔っぱらってんだ！」

小さな店内は、酔っぱらった兵隊で騒々しい。

酔いつぶれたミカサは、何やらゴニョゴニョと言っているが、聞き取れない。

酒臭い口に耳を押しつけると、隣にいた兵が私に詫びを入れた。

あの守衛だ。

「少尉、ミカサ曹長は自分の不注意で沈没してしまったのであります。すまないッス！」

こいつも酔っぱらっているようだ。

「何杯呑んだ？」

「二人合わせて十四杯であります。ゴチでした！」

なんて奴らだ。私の配給カードをめいっばいで呑んだ上に、ツケまで作っている。

「……エリーゼ少尉。カワベ曹長が迷惑をかけたようだな。お詫びをする。こら、隣のお嬢さんに肩を貸せ！」

「のわ！ 少佐！！ 外出されていたのでありますか?!?!」

へビは、この守衛の兵隊……カワベ曹長を知っているようだ。

「曹長、帰るぞ。マスター、こいつらの呑んだ分は次来た時に精算する。いいな」

メガネのマスターは、片側の口元に笑みを作って承諾した。

ミカサは守衛に担がれ、ゲートへ到着した。

私は外出届けに『外人』のスタンプを押ししてもらい、それからミカサを指さした。苦笑する守衛によって、彼女の『外人』スタンプが押された。

ゲートが開かれ、基地に入る。

へビも私と同じように手続きを取り、何事もなく基地に侵入した。へビの足が、市街と基地の区画を分ける白いラインを踏み越えるところを、ドキドキしながら見てしまった。

潜入工員とは凄いものだ。完全にこちらの将校へと成りすまし、人脈まで持っているのだから。

それにしても、いつから暗殺計画を企図していたのだろう。ミネバが生まれる前から対策を講じていたのだろうか。

「エリーゼ少尉。明日、あらためて部下の不注意を詫びに行く。では失礼」

守衛のカワベ曹長は、名残惜しそうにミカサを私に預け、一礼してへビの後を追った。

明日もへビがコンタクトを取ってくる。

計画は動き出した。

公国のカメラマン(4) (後書き)

へべレケの女の子って可愛いですよ。ミカサには作者のエゴが詰まっています。

作者はアクシズの落下に巻き込まれるべきだと思っ方は、是非感想を。お待ちしております。

次回、機動戦士ガンダム〜ソロモンの日々〜

『公国のスパイ』

君は撮り尽くせるか(キャッチコピー)

公国のスパイ(1) (前書き)

ジオン公国宇宙攻撃軍に所属するエリーゼ少尉は、地球連邦軍のスパイだった。

そして、彼女は、要塞司令ドズル中将の息女を暗殺する実行役として機会を窺っていたのだ。

Xdayは明後日。

戦後の行く末を変えかねない計画が進みつつある……

公国のスパイ(1)

UC 0079 Oct 3.

平穏な朝食から一日が始まった。

プレートの目玉焼きに穴を開け、パイロット特権の果物にかぶりつく。

今日はオレンジだ。なんたるジュウシーさ。素晴らしい甘味。

軍に入って良かったことは、毎日の食事が美味しいことだ。そして、果物を毎朝、毎夕食べられることだ。戦争をしているのに、肌が潤うとは思わなかった。

勿論、モビルスーツ教育大隊にいた頃は大変だったし、命を賭けている自覚は常にしている。

だが、毎日の食事を楽しめるのは良いことだ。私は戦争より食事を愛する女である。そして、食事よりもカメラを愛している。だから、良い写真を撮るために、たらふく食べて健康的な身体を維持するのだ。

しかし、隣には健康的ではない者がいた。

「ミカサ曹長。果物だけでも食っておけ。酸味は二日酔いに効くぞ」
机に突っ伏している相棒は、ゴニョゴニョと言いながらも私に従った。同僚のパイロット達が笑った。

まったくだらしがない。

司令部直衛の部隊だったらビンタを食らわされ、胃液が出尽くすまで腕立てをさせられているところだ。スカウト組が多くて、あのマテイが統括している隊だから笑い者になるだけですんでる。

私はミカサの頭に、残ったオレンジを半分を乗せてやった。

「オレンジを食い終わったら顔を洗え。その後は、整備士達と空間測定器の調整をしておけ。私はミーティングに参加してくる。午前中には終わるだろう」

「……了解です……先輩……」
テーブルに頬をつけたままオレンジを租借するミカサ。
本当はお前もミーティングに参加するはずだったんだぞ？
まあ、『明日』は貸しを作ることになるだろうから、先に借りさせてやる。

私はオレンジの皮が乗ったトレイをカウンターへ戻した。

そろそろ八時三十分。

食堂を立ち去る兵や、後方勤務の女子達に混じって階段を下る。

明日は計画の実行日。

きつと、明日の今は宇宙に漂っているだろう。それを考えると身震いする。

私なりに実行のスケジュールは決めているが、まだ関係者と協議したいことは多い。今日中にその時間を取れるだろうか。いや、取らねばいけない。

なるべくなら、このミーティングで段取りを決めておきたい。

IDカードをセンサーに通して、ブリーディング棟へ足を進めた。

「よう、ソロモンの長距離砲」

少し遅れたかと思ったが、室内は一人だけだ。私の上官で、モビルスーツ操縦の師匠。

「変なあだ名を付けないで下さいよ……中隊長。まだ他の奴らは来てないんですか？」

ヒゲ中隊長しかミーティング室にはいなかった。開始時間の五分前だ。普通なら参加者は、みんな揃っていないとおかしい。

「今回は普通の演習とは違う。他のパイロット達には別室で飛行計画を協議するように命じた。エリーゼ、お前は今回の目玉だからな。これからお偉いさんと打ち合わせだ」

いつもとは違う展開に、冷や汗が脇の下を流れる。

内心の動揺を抑えて自分の席へ足を進めると、コーヒーのいい香りが鼻孔を刺激した。

「今日のコーヒーはなんですか？ 隊長」

隊長はコーヒー抽出をささやかな道楽としている。

そして、味が分かるのは私だけなので、ミーティングのたびに豆を変えたりブレンドして舌を楽しませてくれる。香ばしい芳香が室内に充滿して、身体がカフェインを求め始めた。中隊長が欲求の頂点でカップが手渡してくれた。

「キリマンジャロのストレートですね。でも……ローストが足りないんじゃないですか？」

「はは、よく分かったな。煎りが弱いのは験担ぎだ。地球じゃ大変らしいからな。焦げないようにしないと」

キリマンジャロ。地球降下軍の基地がある。

アフリカ戦線は厳しいらしい。ガルマ・ザビ大佐の戦死後、各地で連邦が反抗に出ている。キリマンジャロベースも直接攻撃を受けつつあるらしい。

「上官が験担ぎなんて、部下は不安に思うぞ、中佐」

背後から、重厚な声が掛けられた。隊長はコーヒーを置き、敬礼をする。返礼する将官。見たことがある。

「エリーゼ少尉とは初めて会うな？ 艦隊司令のグエン少将だ」

銀髪で威風堂々とした雰囲気の壮年男性。提督という役職以外、似合わないそんな男だ。

「ハッ！ エリーゼ少尉であります。極秘任務の打ち合わせのため出頭いたしました！」

「顔は知っている。今度の『演習』は君がメインだ。期待しているぞ」

艦隊司令はそう言って、奥の席に腰を下ろすと、続く形でお偉いさん四人が両隣に座った。圧迫感を感じる。

中隊長が隣なのは心強い。時計が九時を指した瞬間、司令は号令

をかけた。

「では、これからミネバ様、暗殺阻止作戦を検討する」

公国のスパイ(1) (後書き)

あれ？ 阻止作戦？

おかしいなと思った方は次のページへ！

公国のスパイ(2)

「本作戦の概要から改めて説明する。第二防空中隊所属、エリーゼ少尉からの通告で、地球連邦軍が司令官閣下のご令嬢ミネバ様の暗殺を画策していることが明らかになった。我々はこの報告を受け、計画の阻止、並びにソロモン内部に潜伏する工作員、また民間人に偽装した連邦のシンパを一斉に摘発する！」

お偉いさんがこちらを向いたのでドキリとした。

昨日、連邦のおばさん中佐に会った後、その足でこっちの上官に報告をした。

元々、私はこちらからの依頼で連邦とコンタクトをとったのだ。ぶっちゃけ、ジオンの情報部は鉛玉には強いが、お金とお酒が混じるスパイとの接触は苦手である。いや致命的に下手なのだ。

そこで、カメラマン時代の黒い人脈を見込また私が、アルバイトさせられることになった。

この話を知った中隊長が「我が隊の要にスパイごっこをさせるとは何事か！」と、情報部へ殴り込んだことは、ここ最近で最も嬉しかったことである。

それは置いて、通常勤務の空き時間に諜報活動をするのは疲れた。『個人での接触』として、偽装することが重要だからだ。

しかし、個人的な思惑もあるので、さほど心労を感じはしない。

「エリーゼ少尉。連邦側からの暗殺要項を説明してくれ」

グエン少将が形式的に説明を求めてきた。私は立ち上がり、ポケットから髪飾りを取り出し少将に提出した。

「この前世紀の『髪飾り』を報酬に、連邦は私へ暗殺を持ちかけて

きました。計画では私の哨戒を兼ねた狙撃訓練で、宇宙港へ到着するゼナ婦人、ミネバ様を射殺して欲しい……とのことです。哨戒訓練なので模擬弾しか携帯していないことを説明すると、途中の宙域においてMD239長距離砲弾を用意すると返答が返ってきました」さりげなく同僚批判をしておく。

連邦がVIPの動向や私の飛行計画、使っている弾丸まで知っていることは、情報部の落ち度になるはずだ。

「暗殺終了後、私は現場を離脱。連邦へ亡命する手はずになります。勲章と大尉待遇が待っているようです。まあ二階級特進することはアレでしょうけど」

そんな上手い話はない。口封じされるのがオチだろう。

私は笑みを浮かべて着席した。

「……暗殺阻止した暁には、相応の報奨を与える」

少将は間髪を入れず応えてくれた。やった。ゲン少将は人心が分かってている。

「しかし……時間がないのは分かっておりますが、司令官閣下にはこのことを説明しないのですか？ 万一のことがあれば我々の首が全て飛びますぞ？」

少将の隣にいるお偉いさんの一人が呟く。

「暗殺阻止の成功、不成功問わず、これがお耳に入れば首が飛ぶよ」

一同、黙り込んだ。

まず、暗殺計画自体が、あつてはならないことなのだ。

ソロモンは、地球とジオン本国の中間に位置する要塞だ。そのソロモンが、本国以上に安全だとすることでジオンの優位を地球人にアピールしている。それがドブル・ザビ中将の対外スタンスなのである。

それにも関わらず、要塞内に作業員が存在して、妻子の暗殺計画がある。そんな報告をすれば、あの気性だ。連邦に総攻撃を仕掛かけかねない。加えて、責任者は総辞職に追い込まれるのは目に見えている。ジャブローの泥沼送りは確実だ。

そのため、これほどの重大事件が、宇宙艦隊司令までで話が止まっている。この会議の議題は、あくまでも『ソロモン宙域における防衛力の強化』なのだ。

「では司令官閣下には内密のまままで事例を処理するんですね。それで私の部下はどういうふうに行動すればよいのでしょうか？」

隊長が立ち上がって、お偉いさんに尋ねる。

「エリーゼ少尉は、連邦が提示するスケジュールに従って行動して欲しい。無論、最後の引き金を引く直前まで」

「お言葉ですが、そこまで擬態して裏切ったことが知られば、少尉が報復されたりしないでしょうか？」

それは心配だ。

「宇宙港へはリックドム二機を警備に配置する。少尉の安全を保証するため、狙撃直前に少尉の元にドムを向かわせる。そうすれば、連邦は狙撃が実行不能に陥ったと思うだろう。それとは別に、我々はこれを機会に要塞内外の連邦共を根絶やしにする。言葉は悪いが、少尉を囚にして害虫駆除をする。徹底的に」

「上手く行くように期待します」

隊長は渋い口調のまま着席した。私の身を心配してくれて本当に嬉しい。

その後、ミーティングは連邦のシンパを捕らえる方法へと移り、私には二、三の囷情報を巻くよう命令され終わった。

隊長とモビルスーツデッキへ戻る。

「まいったもんだな。モビルスーツ乗りがこんな計画に付き合わせるんじゃない」

「そうですか？ 私はドキドキして面白いですよ」

「心配する方は面白くない」

仏頂面をする隊長の肩越しに、見慣れないモビルスーツが動いて

いた。搬入デッキを見ている私に気がついた隊長は、歩みを停めた。「あれがリックドムだ。重モビルスーツにも関わらず、機動力は高機動ザクと同じくらい。装甲は倍以上。一年計画で、ザクと入れ替えるって言っているがどうなることか」

隊長の「どうなることか」の意味は無理だというニュアンスに聞こえた。

「あれでは連邦のジムに勝てないってことですか？」

「1対5では負けるとのことだよ。性能は大事だが、大戦に必要なのは数だ……もっとも、数少なしは開戦時からなので今さら仕方ない」

地球圏では量産モビルスーツ『ジム』の集団戦闘に手を焼いているらしい。ソロモンでも戦訓を受けて、これまでの三機編成から、最小単位を九機に変えてはいる。

しかし、ジムの集団戦闘とはフォーメーションでなんとかなるような数ではないらしい。なんでも戦闘開始になると、ジムがどこから湧いてきて地平線まで覆うという。

噂では、ジムとはジャブローの泥沼から発生したメカ生命体で、分裂増殖して増えるらしい。

「……今回のリックドムの配備にしたって、たった二機だぞ。しかもパイロットは月のグラナダからだ。なんだってこっちにくれない」「ぼやかないで下さい。士気に関わりませう」

モビルスーツデッキはすぐそこだ。

今日のうちに、私のザクを完全に仕上げなくてはならない。整備士の腕には信頼しているが、ミカサはどこまで進めてくれているだろう。二日酔いなので期待はできない。

「……新しい測的手はどうだ？ エリーゼ」

「マテイの送ってくれた人間に間違いはありませんよ」

隊長は「またマテイか」とヒゲを撫でながら、つまらなそうな顔をした。けれど、自分もマテイから引き抜かれたことを忘れないで

欲しい。

緑色のザクが八機と、灰色のザクが一機いる格納庫。しばらく実戦がなかったため、立ち並ぶザクは新品と見間違えるほどだ。外装まで磨かれている。

私のザクカスタム『ライカ』以外。

ライカには装甲板に岩石を貼っている。おかげでザクというより巨大な石像に見える。

だが、外面よりも内側が大事なものは、ザクでも人でも同じだ。その証拠に、中隊長は顔がダメだが素晴らしい人格を持っている。そして、私のライカは、他のザクに比べて二倍早く、五倍も熱源が小さい。加えて複座だ。

たまに何も知らない本国のパイロットが、岩石ザクを見て笑うが、笑いたいのなら笑えばいい。

自慢はしないが、撃墜数十二位は事実なのだから。

公国のスパイ(2) (後書き)

リックドムって格好良いですね。

初見の時、ザクの一直線のモノアイラインに対して、十時のラインが「つよそおお」と素直に思えました。でも、個人的には三連星カラーの引き継ぎはどうかと考えます。ザクグリーンとか、別の迷彩とか……いや、グレーとかいいかも。

いつか、ガンダムがリメイクされたら、ソロモンカラーとかグラナダカラーとかそういう風に乗らさせて貰えたら嬉しい……かな？

さて、次回は『事前準備』

君のフィルムが宙の闇を焼き付ける(キャッチコピー)

公国のスパイ(3)

ミカサはまだ帰ってこない。

昔からニンニク臭を消すと言われる牛乳でも飲みに行ったのだからか。

宇宙世紀にもなって、口臭を消す薬が完成しないのは謎だ。

しかし、折角一人になれたので、頭の中で計画当日のスケジュールをイメージすることにした。

八時ジャストに、ライカでソロモンを出撃。

護衛の二機と分かれ、私は自己判断で狙撃ポイントへ移動。

その間に、連邦軍から長距離砲弾の補給を受けて宇宙港を目指す。予定通りなら、狙撃マウントに入った頃、ミネバの乗るムサイが寄港するはずだ。

ここで、連邦のシンパがミネバの搭乗を確認。発光信号で合図することになっている。連邦側の計画では、私がムサイの前部砲塔を狙撃し誘爆させる。そして、ターゲットは爆死する予定だ。

だが、こっちの計画では、射撃は行われずに宇宙港からドムが発進して私を保護。作戦終了となる。

頭で考えると簡単だ。作戦時間も二時間と掛からない。しかし、本当の作戦はこれだけではない。この程度の作戦なら、ここまで緊張もしないし、準備もいらぬ。私には私の目的があるのだ。

問題は、それが上手くできるかと言うことだ。

ザクのモニターを立ち上げる。

ブンツと起動し、視界が開けた。格納庫が私の目線で投影され、

まるで装甲板がなくなったような錯覚をうける。

熱源フィルターを入れて探知。上方で、モノアイがスライドする滑らかな音がした。モニター画面はモノアイに連動して、左から右へ人型の熱源が映し出され、格納庫の風景と重なる。

自動的に対人警戒システムが始動し、感度を『接触』に合わせる。

私はシートへ横になった。さぼる時はいつもこうしている。お偉いさんが来てもモニターさえつけておけば、対人接触のアラームが鳴って気がつく。

今のうちに、ゆっくり休んでおきたい。

うとうとし始めた頃、足下で何やら異変を感じた。

モゾモゾと何かが動く気配。

「エリーゼ少尉。将来の話をしたい」

私のふくらはぎの辺りから現れたのは、連邦軍の潜入工作員『ヘビ』だった。連邦の制服を着た士官姿だ。

いつの間にライカに入り込んでいたのか。

「あなたは、よほどふくらはぎが好きなようね。で、何の用？ 計画に変更があったの？」

「いや、君の行動に変更はない。ただ、ミネバを乗せた艦の入港場所が変わった、ポイント『08-a』より内側で計画を遂行して欲しい。君の方には何か問題はあるか？」

私はモニターの画面に、ソロモンの周辺マップを展開させた。先程の会議で、入港予定が変わるなんて聞いていない。

ヘビは偽情報を掴まされたのだろうか。

「狙撃位置には問題ない。ただ……」

「ただ？」

私の告白にへビの目が鋭くなった。

「ジオンに計画が漏れている」

流石にへビは、場数を踏んだ潜入工作員だ。

私がリークする衝撃的な事実にも表情を変えなかった。

「計画が漏れているとは、どの程度だ？」

「少なくとも暗殺計画の存在がばれている。そして、ソロモンのスパイ網は風前の灯火。私は雇われただけで、撤退を進言するよ」

「ミネバはソロモンに来るのか？」

「予定の変更は無い。それは確認済み。どうする？ 計画は白紙か？ もし、止めるのなら私も地球に降ろして欲しい」

ザクモニターをスクロールさせる。整備員士が近づく気配はない。ミカサは、奥の水場で歯磨きをしている。邪魔する人間はいない。

どうする連邦軍？ ここで尻尾を巻くか、根性を見せて計画を強行するか？

私が、お前らなら答えは一つだ。

「……計画の変更はない。しかし、都市部の協力者へ警告をする。無論、今回の計画に携わる者以外だが」

さすが、軍人。

それしか、答えはないよな。連邦の本気が見られて安堵した。

残念だが、グエン少将らと話し合った計画に、私が乗ることはない。

『私は私のためだけに宇宙を飛ぶ』のだ

作戦は継続。

脱出シャトルが用意されるとは思わない。それでも『実弾』はスタンバイされるはずだ。連邦からすれば、成功すれば『大穴』くらい成功率の少ない作戦。

だが、やって損のない作戦だ。

失敗しても、何人かの作業員と『協力者』が殺される程度。成功すればザビ家の血縁を葬ることが出来る。ミネバ・ザビと、運が良ければ出迎えるドズル中將も。私という協力者への『実弾』提供は、それなりのリスクを背負ってもやってくれるだろう。

私が欲しいの実弾だけだ。実弾のためだけに連邦の計画に荷担するのだ。

「では、エリーゼ少尉。決行前に会うのはこれが最後になる。健闘を祈るぜ」

へビは、擬態しているジオン士官の表情に戻る。

それでも、私のふくらはぎには未練があるようでネットリと揉んでいた。年頃の女である私は恥じらいを感じつつも、ふくらはぎで満足する安上がりな男を気に入っていた。

もし、地球に生まれていれば、こいつを助手にして報道事務所を立ち上げていたに違いない。へビを使ってスキャンダル女優を誘き出し、私が激写。うまくコンビが組めたらどう。妄想でしかないが、「ところでさ、作戦を開始したらお前はどうするんだ？」

へビのふくらはぎを揉む指が止まってしまった。

「珍しい奴だな。スパイの後先を気にするなんて」

「まあ、こっちは裏切り者だからね。協力してくれる人のことが気になるんだ。やっぱり、計画がはじまったらトンスラ？」

人の良い青年士官の表情が、再び爬虫類の顔になる。

「お前のサポートに徹する。どんな手段を使っても計画達成に全力

を尽くす」

「じゃあ、計画終了後は？」

「失敗すれば自決」

「成功したら？」

「やつぱり自決」

なんだそりゃ？ どっちも自殺ってどういうことよ。

「それが、潜入工作員のサダメってやつ……？ 逃げればいいんじゃない？」

へビはヒヤハハと笑った。

「そうすれば、捕まる可能性があるだろ。それで捕まったら自白剤を入れられて、仲間の居所をしゃべっちまう。そうなる前に自決するのが決まりだ。因果だよなア。成功しても、失敗してもスパイ狩りはあるんだからよオ」

へビの双眼が、クラッチペダルの辺りで光る。

凄いな、潜入工作員ってのは。

ジオンの腰抜け諜報部とは覚悟が違う。こいつらの覚悟はどこから来ているのだろうか？

「どんな動機で命を賭けるの？」

「簡単。憎しみだ。ジオン共が吹っ飛ばしたコロニーに俺の両親がいた。それだけだ」

復讐ってわけか。確かに簡単だ。

きっとこいつは、ドズル中将が開戦初期に攻撃したコロニーに住んでいたのだろう。予想した答えの一つだが、やはり敵の兵士と話すとろくなことがない。

私が黙り込んでしまうと、再びふくらはぎが揉まれ始めた。

「あんまり、気にしないでくれ。ジオンが嫌いなだけで、お前の脚

に罪はねえ。だから、お前がミスってもフォローしてやるよ。どうせ死ぬ身だ。全力でお前を守る」

ヘビの顔は、ハンサムな士官の顔に戻っていた。

「ふふ。脚以外は罪深いということね。来世で会おう」

「おうよ」

ヘビは、海を泳ぐウミヘビのように体をくねらせて、コクピットから出て行ってしまった。

モニターの熱源探知機は、ヘビがどこへ消えたのか感知できなかった。

公国のスパイ(3) (後書き)

女の人のふくらはぎには2種類あります。

一つはスネ毛の生えた脚。もう一つは手入れされた脚。つまり、この部位で女性の状態が全て分かります。だから、男性はふくらはぎが見えるスカートを好み、パンツを嫌悪します。

どうです？ この小説を読んでくれた数少ない女性のあなた。

ミニスカートが履きたくなっただんじやないですか？ その気持ちは間違いではありません。

そう、間違っていないのです。

そして、男性諸君。ミニスカートから覗く生足に讃歌しようじゃないか。

次回、機動戦士ガンダム〜ソロモンの日々〜

『男子寮潜入』

君は男の脚を撮る(キャッチコピー)

公国のスパイ(4)

……酒の配給を空にされたので、飲み物が無い。

すでに時刻は十一時だが、目が冴えてしまっている。睡眠導入剤を使うと、明日の作戦に影響する。私はしばらく女子宿舎で悶々としていたが、三十分が過ぎた頃、眠ることを諦めた。

何気なく、枕元に置いているカメラを手に取ると、シャッターを押したくなった。被写体を探すと、ミカサの寝ぼけた顔があったので、ピントを合わせる。

そして激写する。

フラッシュが光り、寝顔はフィルムに焼き付けられ永遠になった。これでミカサの下着姿も永遠だ。

フタサンサンマルゴー。午後十一時三十五分。

八時間ほど前、ヘビと別れてから部隊内での打ち合わせが行われた。

他のパイロットには暗殺計画は伏せられている。そのため、いつもと変わらない演習前ミーティングではあったけれど、ソロモンにも連邦の足音が聞こえている今、パイロットの士気は高い。

細部の詰めに熱が入り、終わったのは五時。

それから、ライフルの調整をメカニックと納得するまでおこなった。普段から、ライフルの整備には細心の注意を払っているので、「念のため」にした調整だったが、驚いたことに光学機器の破損が見つかった。スコープに使われている部品は、湿度の変化で不具合を起こすこともある。ミカサの出身メーカー『メガネ屋』から技術者呼び寄せてパーツを交換。あらためて照準機の確認をして、終わったのが十時だ。

ミカサは整備が終わった途端、パンをオレンジジュースで流し込んで寝てしまった。二日酔いが生理と重なっていたらしい。辛かったようだ。

それでも、一人だけヨダレを垂らして熟睡しているのが気に入らない。

もう一枚、写真を撮った。

貧乳の間から見える寝顔。

もう少し、エロい身体をしていれば女優として大成するだろうに。少し勿体ない。だが、ルックスはヨダレを垂らしていても素晴らしい。

エロく見えない構図で、芸術的なエロさを撮るのがプロの手腕だ。露出を変えて三枚撮ると、私は満足した。フィルムを巻き上げる。そして封筒に入れる。宛先は守衛のカワベ曹長。私が生き残れば、神として敬ってくれるだろう。

死んでしまえば遺影にもなる。無駄はない。

けれどもまだ、物足りなさを感じる。私は女子宿舍を抜け出た。目指すは男子寮。植え込みに隠された秘密の通路を潜り、男子寮に潜入した。鍵を開けておくように命令している窓を潜り、いびきをかき兵隊のベッドを抜ける。そして、廊下をネズミのように走り、士官食堂にたどり着いた。

コポコポと湯を沸かす音がする。

被写体はまだ寝ていないようだ。

「……エリーゼ。また、撮りに来たのか？」

「こんばんは、隊長。うちの女子共に、隊長の口ヒゲが人気なんで盗撮しに参りました」

ヒゲの中隊長は、私が男子寮に来て驚かない。この人は勘がいい。私がここへ来ることが分かっていたに違いない。

「眠れんのか？」

「はい。ですから、カルピス比率のカフェラテを下さい。睡眠薬代わりになりますので」

ヒゲの隊長は、湧いたばかりのお湯を使ってコーヒーを入れてくれた。給湯室の白熱灯が、カップから立ち上る湯気を照らしている。明日のことを考えて、緊張しきっている心が解されるのを感じた。

ドッグファイトで無敵の隊長も、コーヒーを煎れている姿は喫茶店のマスターだ。

もしも戦争が起こらず、みんな一緒のコロニーで暮らしていたらと夢想してしまう。

きつと、隊長は喫茶店のマスター。私は彼の喫茶店に入り浸っていたに違いない。駆け出しのカメラマンである私は、女優のミカサに写真を撮らせてもらって、守衛のカワベから神のように崇められる。

淡い『もしもワールド』がモヤモヤと頭の中で湧き出す。やはり、精神状態が良くないようだ。

コーヒーの香りを嗅ぐだけで、平和な頃とか、希望とかを思い出してしまう。

「……マスター。コーヒー豆、ローストしすぎじゃないですか？ 昼間、験を担ぐとか言っていたのに」

コーヒーに混じる香りが、昼と違うことに気がついた。隊長の手が一瞬止まる。

「キリマンジャロが墮ちた。三日後、発表されるはずだ」
身体がぞわりと震えた。

地球に降下した仲間が心配だ。

逃げようにも、HLV（大気圏突入輸送機）が足りないと話に聞

く。降りたはいいけど昇れない。連邦の妨害もあるだろうが、地球はブリティツシュ作戦で汚染されているという。友軍の苦境に鳥肌が立った。

「どうなるんでしょうね。そろそろソロモンの出番でしょうか」
「ルナツーが騒がしくなっているらしい。遅かれ早かれ主戦場はここになるだろう」

隊長は、コーヒー風味のカフェラテを私の前に差し出した。

マグカップが芯まで温かい。きつと、お湯に浸けていたのだろう。モビルスーツの乗り方を教えてくれたこの人に、私は一生頭が上がらない。

「……ソロモンが戦場になるってことは、アレですね」
「アレだな」

図上演習で、開戦後一年の間にソロモンまで戦線が押し返されると、敗北する予想が出ていた。それは、私のような半分軍人でも、簡単に理解できる予想だった。

コーヒーは少し、苦かった。

「隊長。除隊したら喫茶店、開いて下さいよ？」

「お前が撮った写真、飾ってやる」

隊長が、嬉しいことを言った瞬間をカメラに収めた。期待する未来が約束されて、私は眠気が出てきた。もう少しだけ隊長に甘えなかったが、作戦前には心残りを作れと言われている。帰ってから、甘えさせて貰おう。

「ごちそうさまでした。明日戻ったら、また淹れて下さい」

「分かっている。明日は、八時ジャストにテイクオフ。頑張れよ」

「了解」

公国のスパイ(4) (後書き)

微塵もないと思ったらラブ要素。エリーゼ少尉も女の子です。さて、恋する乙女が撮ったミカサの写真はいらぬかね？ 感想欄に写真希望と明記の上、下記の宛先まで(以下略)

次回、機動戦士ガンダムとソロモンの日々

『出撃』

君は戦場の悲しみを撮る(キャッチコピー)

公国のスパイ(5)

作戦当日。

起床のサイレンをザクのコクピットで聞いた。

「先輩。模擬弾の装填完了。弾倉に三発。予備マガジンは二つ装備しました」

「……『装備しました』って格好良く言い過ぎじゃない？」

ミカサが吹き出す。

二メートルほどのマガジンは、腕の形をした岩石に錆びたワイヤーで括り付けているだけだ。

ミカサよ。少し笑え。

力が入りすぎている。実戦は初めてだから仕方ないだろうけど、少し緊張を解せ。

いよいよ、計画が始まる。

ジオンと連邦の綱引き。少しでも読み間違えれば命はない。私だけならともかく、何も知らないミカサを犠牲にするのは絶対にごめんだ。

外部マイクのスイッチを入れる。

「コモンズ！ 擬態の岩石はスラスターに干渉してないな？」

「動かして下さい！」

整備士のコモンズに、スラスターの動きを確認させる。操縦桿を低速で右回転させ、ノズルを回す。

「異常なし！」

「ごくらう。コモンズ。」

「少尉。ただの訓練だったのに、空気がピリついています。あちらさんのドムも動いてますし、よく分かりませんが気をつけて下さい。こういう空気の時って、妙なことが起こりやすいんで」

「たく、クルクル坊主が言うようになったじゃないか。」

これからミネバ様が暗殺されようとしています。そして、実行役は私です。

不穏な空気を読めるようになったコモンズ君。私はお前を一人前以上だと認めてあげよう。

「気をつけるよ、コモンズ。ところで、あのリックドムってのは、太ったおばさんに似てないか？」

コモンズは破顔した。

私はすかさず、笑ったコモンズの顔をモニター越しに写真へ収めた。

「……先輩、いいんですか？ モビルスーツの中にカメラなんて入れて」

「ミカサよう。私からカメラを取ったら、何が残る？」

「教えて下さい」

「答えは『何も残らない』。私はスナイパーである以前にカメラマンなんだ」

ミカサはメモ帳を取り出して、私の台詞を書き込んだ。

またしても、私の名言録に一言加わったようだ。だが、今の台詞は私が死んでも残って欲しい。

中隊三番機のザクが動き出す。続いて二番機。ゲートへの移動を始め、ザクの足音とゲートの開閉音が重なり騒々しくなった。

「ところで、お前は私の名言集を作ってどうするんだ!？」

ミカサはコホンと咳払いをした。

後部座席からミカサは手を天に向けて乗り出す。何のつもりだ？

「その時、彼女は答えました。『私はスナイパーである以前にカメラマンなんだ!』と……戦争が終わったら、先輩がヒロインのドラマを作って自分で出演します。もちろん、エリーゼ少尉役で」

外部マイクを通して、格納庫内にミカサの美声が響き渡った。

コモンズら、整備士が爆笑している。

「アハハハッ！ じゃあ、お前の役は誰がやるんだ？！ 一人二役か!？」

「考えてませんでした!」

面白いことを言いやがる。

これから、第二部のクライマックスだ。降板しないように気をつけろよ。ミカサ。

コクピットの装甲板を降ろす。

モノアイ起動。

凶暴な一つ目が光を放った。

「ザクスナイパー出るぞ!」

三番機に続いて、私は宙へ飛んだ。

私だけのフィールドへ向かって。

公国のスパイ(5) (後書き)

ついに出撃！ とても『ガンダム』だと思えない話が、やっとらしくなりました。モノアイが光りましたよ。元は偵察機なのでモノアイに十字のラインが入ってるんですよ。あれって格好いいよね。そう思う方は是非、感想を。

次回、機動戦士ガンダム〜ソロモンの日々〜

『宇宙を駆ける』

君は戦場の悲しみを撮る(キャッチコピー)

公国のスナイパー（1）

宇宙を駆ける。

「三秒で、先発した護衛機に追いついた。モビルスーツ機分並の重量があるライフルを持ってても、この速度。そして推進剤の残量を気にしなくてよい『庭』での作戦行動。強行偵察型ザク『ライカ』の調子は良好だ。操縦も楽しい。」

「先輩。護衛機より入電。『作戦宙域に散開し警戒す』以上」
ミカサの知らせと同時に、両脇のザクが速度を上げ天頂方向へ飛んで行った。

狙撃位置を固定したら、動けなくなるわたしを守ってくれる護衛機。

私に狙撃させるために身代わりになった者もいるし、囷になって虚空へ消えた機もいる。

私が威張っている撃墜数は、彼らのサポートしてくれた結果に過ぎない。

「宇宙港の入り口まで、十二分の位置に入りました。狙撃位置の設定、よろしいですか？」

ミカサは、狙撃に適した岩礁や宇宙ゴミにマーキングを入れたマップデータを、サブモニターに回した。目標を狙うのに最適な位置をよく理解してくれている。だが、どこを使うかはすでに決まっている。

ここで、ミカサのノーマルスーツをコンコン叩いて、マイクを切りさせることにした。ブツツという音と同時に私は、ヘルメットを脱いだ。ミカサもそれに倣う。

「しよ、少尉。怖くて死にそうです！」

「マイクを切った途端、ミカサが叫んだ。

「眉間にシワを寄せるな。変態が悦びそうな顔をしてるぞ」

「……だって、ミネバ様ですよ？ 失敗したら処刑されてしまいます。いや、いや、その前に陵辱されて、この世の地獄を味わってから殺されるに違いありません。どうしよう！」

マテイから紹介されたミカサは、私に与えられている本当の任務を知っている。危険すぎる任務だが、それに付いて来てくれる人間を私はパートナーに採用した。

絶対に裏切らず、有能。

前のパートナーを失ってから、この手の作戦に荷担することはできなくなっていたが、ミカサを手に入れて、この宇宙に戻って来られた。

それでもミカサは年相応の娘に過ぎない。

一昨夜の深酒は、緊張に耐えられなかったせいだろう。もし、私がミカサと同じ年で、同じ任務を命じられたら逃げ出している。こいつは立派な奴だ。

「ミカサよ。嘆いても仕方ないぞ。作戦が終わったら褒美をあげるから」

「き、期待していいんですか？」

「泣いて悦ぶはずだ」

少し落ち着いたミカサ。

多分、アレは嫁入り道具の足しくらいにはなってくれるだろう。

「先輩は、飴と鞭の使い手ですね。飴が本当に甘いからイヤになります……見つけました。連邦からの情報通り、サラミスの残骸を発見」

ザクの進路を変える。

ソロモンを背にして東の『S-58』ポイントに巡洋艦だった残

骸が宙に浮んでいた。ジオンを苦しめた巡洋艦の面影はなく、漂っているのは艦橋の一部でしかない。それでも死んだ兵士の執念なのか、残骸には連邦のシンボルが残っていた。

計画では、ここにライフルの弾が用意されているはずだ。

マニピュレーターを使い、残骸の内部を探す。艦長が座っていたであろうシートの裏で三本の弾丸が見つかった。

「ミカサ。ライフルに入っている弾丸を排莖してくれ」

「了解」

「ザクスナイパー」ライカ”の武装であるスナイパーライフルは、それだけで一個の兵器だと言っている。ライフルの固定、標的の測定的、照準は、とてもモビルスーツを動かしながらできるものではなく、ライフルの管制をするためにミカサのような観測手が必要になる。

ドゴンツと機体に排莖音が伝わり、3メートルある模擬弾が宇宙に放出された。模擬弾の行方を確認し、記録。マニピュレーターで掴んでいるライフル弾をマガジンを装填。ピタリと収まった。さすが連邦軍。模倣は一級だ。

「これを手に入れるために、連邦と取引するなんて正気ではありませんね」

ミカサは恨めしそうに呟く。

「仕方がないだろ。私が撃ったことがばれば、マティの首まで飛ぶんだから」

この特殊な弾は、生産数がカウントをされているから、連邦が用意してくれないとアリバイが作れない。恩人であるマティの首もそうだが、自分の首も守らなくてはならない。

私はサラミスにポツカリと空いている被弾痕を広げた。ちょうど、ザクの脚が隠れる手頃な大きさになった。

「ここを狙撃ポイントにする。ライフルの固定は任せたまそ」

「了解」

ザクの脚部はガリガリと、金属音をあげてサラミスに入り込む。

機体は完全に固定できた。おそらく岩片がサラミスの残骸に衝突したように見えるだろう。機体の固定を確認したミカサが、有線で繋がるライフルに信号を入れて、バイポットを広げる。銃脚はサラミスの装甲に食い込み、同時にライフルの基部からカモフラージュ用の繊維がスプレーのように飛び出した。

繊維は周囲の色に合わせて色を変え、虚空にたなびく。

連邦の星マークを串刺す形でライフルがスタンバイされた。

ここまでは上手くいっている。実弾は手に入り、理想的な射点も手に入れた。

「W軌道からムサイ確認。信号はムラサキ。目標艦です」

ライフルからの長距離映像に巡洋艦ムサイが映し出された。

ザクのモノアイも標的のムサイを確認している。全て計画通り。

おそらく数分でソロモンの領空に到達するだろう。

このまま計画通りに進んでくれれば良いのだが。

しかし、個人の思惑通りに戦争は動かない。

私の甘い願望に、神様か悪魔が気がついてしまった。

不確定要素が接近してくる。

「少尉、熱源接近！」

緊迫したミカサの声が空気をチリチリさせる。

公国のスナイパー（1）（後書き）

サラミス（残骸）が登場！ 大量造艦された戦艦って格好いいですよね。艦首にナンバーが書かれてたりするとゾクゾクします。さら、次回予告。

『邪魔者』

君は宙の涙を撮る（キャッチコピー）

公国のスナイパー（2）

「廃熱量から推測。リックドム二番機です」

「メインエンジンの回転数を限界まで絞る。ライフルもスリープさせる」

「了解」

コクピット内に重く響いていたエンジン音が小さくなり、ライフルの送電コードから聞こえていた負荷音も消える。

なぜ、ここにドムが来るのか分からない。

しかし、私の仲間はミカサと隊長だけだ。この作戦では護衛機ですら信用はできない。

私は、私の目的と、ソロモン司令部とは別の意思によって動いている。したがって、近づいて来るものは全て敵だ。

もしかしたら、あのドムは、私の『雇用主』であるマテイの思惑が看破されて、阻止しに来たのかもしれない。

「リックドム接近。距離1000、800、600……」

ミカサの声が震える。

等倍に投影するモニターに、公国最新鋭の重モビルスーツが近づいてくる。装備はザクマシンガン。明らかに近接戦闘を想定している。

「さらに接近。200、100……ドム正面……」

モノアイが十時の中で光る。

何度も経験した戦慄。

擬態が見破られたのだろうか？ それとも宇宙ゴミを排除しに来

ただけなのだろうか？ ドムのモノアイが左右に揺れる。そして、ライフルのそばまでドムの腕が迫る。やり過ごせるのか。それとも……

私は緊急脱出用バーニアに火を入れるボタンへ指を掛けた。ばれたら逃げるしかない。覚悟を決めるべき瞬間、ドムのモノアイは上を指向した。

そして、ドムのスラスタは火を噴き、爆音と共にソロモンへ戻って行った。

助かった。

ミカサの緊張が解けていくのが、シートを通して伝わってきた。

「……ミカサ。宇宙港の様子はどうか？」

返事がない。

「ミカサ！ ライフルをスリープから起こして、宇宙港の現状を報告しろ！」

「ほうこく？……！……す、すみません！ 巡洋艦ムサイ入港。接舷準備中！」

ドムの接近で放心したミカサが慌てて答えた。不確定の出来事では手順が変わってしまうが、問題はない。

「ライフル弾装填！」

「装填します」

連邦から供与された弾が、ジオン公国のスナイパーライフルに装填された。ジレット高性能溶薬が薬莖から噴き出し、銃身内部をコーティングしていく。そして、ライフル本体からは圧縮ガスが薬室内へ注入され、弾丸を特殊ガスによって固定する。

「弾丸先端部とスコープ照準、同期完了。問題なし」

40キ口先のコインを貫ける精度を持ったライフルの準備が整った。

「こつちで照準を合わせるぞ」

「おまかせします！」

ムサイは曳航シャトルに導かれて入港を始めている。
時間通りだ。

ライフルの高倍率スコープを通しての映像をモニターで精査する。
ソロモンの十二個ある宇宙港。ムサイは、その最も大きい隔壁へ、
レーザー誘導される。

そのまま、要塞側からアームが伸び、ムサイを固定。すぐにラッ
タルが接続された。

ミネバ・ザビの到着。問題は誰が出迎えるかだ。

「要塞内の気密扉、開きました」

開かれた扉の奥から派手なノーマルスーツを着た大柄の男が現れ
た。

間違いない。ドズル・ザビ。

側近を連れたドズル司令は、ムサイの甲板を泳ぐように飛び艦内
に入っていく。

ほどなく、艦橋で抱き合うドズルとゼナ婦人、そして乳幼児。

どんな高い立場の人間でも変わることはない再会の喜び。戦場では
場違いな微笑ましさを感じる。

「これで条件は揃った。ミカサ、やるぞ」

「了解」

私はトリガーを絞った。

撃鉄が落ち、雷管を叩く。

弾薬に火が付き、弾丸が音速を超えて射出された。

ソロモンを目掛けて、一筋の死の線が引かれる。

一瞬で爆発が起きた。

公国のスナイパー（2）（後書き）

ついに発射！

風雲急を告げる銃声がソロモンに轟く。

次回、機動戦士ガンダムvsソロモンの日々

『要塞の爆炎』

君はコンペイトウを撮り尽くす（キャッチコピー）

公国のスナイパー（3）

爆発は、巡洋艦ムサイの背後、要塞内部へ続くハッチで起きた。燃料倉庫に引火し誘爆する。

スコープモニターの中には、ドズル司令が妻子を庇う姿が見えた。

「命中、爆発炎上。要塞ハッチ使用不能」

「まったく、誰が子供に手を掛けるかよ。あんな家族を殺せば、自分を殺すのも一緒だ。戦争が終わっても平和な日々は戻らない。子供と大人の命は絶対に違う。」

「命令通り、要塞の出入り口を封じた。あと、二発で決着をつけなくてはいけない。ムサイの周囲を警戒。不審な動きを絶対に見逃すなよ、ミカサ」

「了解」

早くもムサイと港から救助兵が飛び出してきた。こいつらの中に連邦のスパイが混じっている。しかし、人間の相手は私の仕事ではない。私の目標は……

「ドム一号機、ムサイに接近。攻撃態勢！」

トリガーを引いた。

リックドムがヒートロッドを振り上げた瞬間、がら空きになったコクピット部分へ弾丸が直撃。

「命中！ リックドム停止！」

やはり月のグラナダから送られたドムには、不穏な目的を持っている人間が乗っていた。

そして、ドムでの警備を決定したのはグレン少将。

ドズル中将の妹であるキシリア・ザビとは、月のグラナダで深い

関係だったと聞いている。だが、ドムに乗っている人間が誰なのかは今の時点では分からない。マティはキシリア機関が暗殺計画の黒幕だと睨んでいるが、ギレン総帥の可能性も否定できないし、連邦の陽動に乗った反乱分子の工作であるかも知れない。

だが、私には誰が犯人でも関係はない。私にマティから課せられた使命はただ一つ。

『敵』の焙り出し。

ソロモン司令部から命じられたのは、暗殺の絶対阻止。

私はこの二つの命令と、自身の目的のためにトリガーに手を掛けている。

公国のスナイパー（3）（後書き）

ちよっと、今回は短くなってしまいました。

次回、機動戦士ガンダム〜ソロモンの日々〜

『それぞれの陰謀』

君はコンペイトウの涙を撮り尽くす（キャッチコピー）

公国のスナイパー（４）

今回の事件が複雑になってしまったのは、本国にいるマテイが、連邦諜報機関の不自然な動きに気がついてしまったことにある。

極秘に行われた中将妻子のグラナダ訪問を連邦が知っている事実。そしてムサイの到着時刻と接舷ベイの情報が漏れている事実。それらを総合するとある結論に達した。

それは内通者の存在。

事件に上層部に近い人間が携わっていることは疑いようがない。さらにザビ家次男の血縁を絶とうとする『グラナダにいる身内』の可能性も出てきてしまった。

まず、マテイに対してドズル中将一家を囿にしてもグラナダの陰謀を暴けと、総帥に近い人物から命令があったらしい。

だが、ギレン総帥は表向きキシリア少将の陰謀を防ぐように命じつつも、暗殺阻止を厳命しない。キシリア一派は自身が暗殺の黒幕とされている事実を知ると、アリバイでも作るかのようにグレン少将とドムを送り込んで、警護を命じた。さらには連邦軍の内部からは、暗殺を潔しとしないグループの内ゲバも寄せられるありさまだった。

マテイも最初こそは、連邦にミネバを売ったのが、どのグループか探ろうとしていた。しかし、複雑に絡み合った事情は簡単に解れるものでもなく、そもそも、どの組織も黒幕のようでもあった。

結局、マテイは全部の依頼の『真ん中』をとることにした。

連邦による暗殺計画発生を阻止せず、中将一家を危険に晒す。そして、誰が犯人かを突き止める。ようするに、私がマテイから受けた指示は、連邦から弾を受け取り要塞隔壁のハッチを破壊すること。

そして、暗殺実行犯が『狙撃失敗』の尻ぬぐいをするために動くのを待つて狙撃。その後、暗殺犯の特定をする。

なんとなくマティのやりたいことは分かる。しかし、意味のないことだ。

敗戦の可能性も出ているのに無意味な権力争い。

立案したマティ自身、連邦独自の暗殺計画だったらいいな、と笑っていた。そのマティの計画に私が乗ったのは、命令がミネバ・ザビを暗殺者から守ることだから。あくどいことをいくらでもするマティに従っているのは、彼が私に近いルールを持っているからだ。彼は残酷だが、非道ではない。

だけど、使えるのは連邦がくれた3発の弾丸だけ。部隊の実弾を使えば、私が火種を作ったことがばれてしまう上、マティにも繋がって大火事に発展してしまう。連邦を欺き、実弾を貰って騒ぎを起こして、犯人を見つけて、被害者も守る。

私が一番の貧乏くじを引いている。

司令部に私の行動が看破されれば銃殺。成功しても私のちよつとした欲望が発散できるくらいだ。我ながら、よくマティの口車に乗ったと思う。

とりあえず、私が狙撃に失敗した対処のためにドムが動き始めた。

この事実への対応は専門家に任せたい。

今、気にするべきことは……

「ドムの二番機はどこ?!」

「見えません!」

モニターでは、探知を繰り返す幾多ものウィンドウが目まぐるしく切り替わる。

狙撃したりツクドムからは、燃料が漏れてムサイの周囲を燃やしている。おかげで視界が悪くもう一機のリックドムが見つからない。ドム二番機は、狙撃前に私たちのそばを通った機体だ。あの動きは不自然だった。暗殺実行グループが乗っけていても不思議ではない。死角に潜んでいるのか、それとも一番機がやられたため、要塞の外へ逃げ出したのか。

要塞のカメラにリンクできれば、おおまかな場所が分かるのだが、痕跡を残すことはできない。焦りを感じる。

この至近距離であれば、モビルスーツが少し動くだけで、止まっている巡洋艦などすぐ撃沈されてしまう。

宇宙港は大混乱に陥っている。

ハッチの爆発と、ドムへの狙撃。大火災と誘爆の連鎖。右往左往する救助隊。だが、混乱に飲み込まれるな。冷静になれ。

不意にムサイの対空機銃の一つが動くのが見えた。

「ミカサ！ ムサイ右舷に照準！」

モニターが機銃をアップにした。その瞬間、ムサイと係留している楔の間からドムが躍り出た。

速い！

トリガーを引く。

そして、弾着を見ず、私は推進剤に火を入れた。サラミスの残骸を振り払い、爆発的に発進するライカ。

「先輩！？」

私の狙撃はドムのマシンガンごと右半身を吹き飛ばした。だが、撃った瞬間に仕留めそこなったことは分かっている。とてもこの状況で、コクピットだけ狙うのは無理だ。武器を破壊できただけで上

出来。核融合炉に当たらなかつたのは奇跡。

しかし、リックドムはまだ動ける。そして、ライフルには弾は入っていない。私に出来る選択肢はいくつも無い。

お人好しな私はザクを突進させることを選んだ。ザクのバーニアが焦げ付くほどの推力でソロモンへ駆ける。

公国のスナイパー（4）（後書き）

次回、機動戦士ガンダムとソロモンの日々

『要塞への突撃』

君はコンペイトウの涙を撮り尽くす（キャッチコピー）

公国のスナイパー（5）

ライフルを放棄し、グンと軽くなった機体の疾走に耐えながら、私は叫ぶ。

「ミカサ！ 擬態を落とせ！」

「了解！」

ミカサは後部座席に仮設されているレバーを引いた。

ザクを覆っていた岩石が、バラバラと剥がれ落ちる。彗星のように尾を引き、機体はさらに加速した。剥き出しになったフレームが宇宙に晒される。装甲と擬態が無くなったため、推進力がそのまま速度に繋がる。

ソロモン領空に到達。コンペイトウのような形をした要塞が大きくなっていく。

「前方に哨戒艇！」

悲鳴のようなミカサの叫びを無視して、スロットルを更に回す。こちらに気が付きもしない哨戒艇のコクピットを掠めて、ソロモンへ突進する。

宇宙港の猛火が機体を照らし始めた。

敵は動き出している。

左腕と片足で、ムサイをよじ登っているドムを私は捉えた。

「緊急脱出用ブースター点火！」

「点火！」

強行偵察を目的に設計されたザクは爆発的な増速をした。ランドセルに増設されたタンクから、真っ白い閃光が噴き出し、突進の後押しをする。首の骨が折れそうな加速が全身に襲いかかった。

みるみるムサイに近づき、ドムが大きくなってミカサが叫んだ。

「しよ、少尉、武器がありませんよ！」

たしかに武器はない。ライフルは捨てた。標準装備のトマホークも積んでいない。しかし、問題はない。

「ミカサ！ 一個、私には秘密があるんだ！」

加速度的にザクの速度は上がり続けている。極限まで装甲を削ったザク強行偵察型は、急加速をしたこの三十秒ですでに推進剤の九十パーセントを吸い込んでいた。対Gスーツの限界を超えて、肋骨が軋んでいる。

「ど、どんな秘密ですかー！？」

ソロモンの宇宙港に侵入した。

ムサイの護衛だったはずのザクが、母艦を襲うドムを無視して立ちほだかる。マシンガンが乱射された。

しかし、姿勢制御し、つま先を進路に向けた私には当たらない。

つまり、ライカの脚が、裏切り者の頭部を吹き飛ばした。

反動で飛んだヒートトマホークを掴む。

「すごい！」

「ミカサ、私の秘密はこれだ！」

急速に灼熱化するトマホークを振り上げた。

「隊長直伝の格闘戦闘が私の本当なんだよ！」

トマホークが、ドムの頭頂部から胸部まで一気に切り裂いた。腰部まで焼き切り、途中でエネルギー供給が切れるも、激突の衝撃が刃を進めさせた。それは時間にして一瞬。

ライカは、ドムもろともムサイの艦橋にめり込んだ。逆噴射は間に合わない。

激突の瞬間、衝撃で意識が飛んだ。

気がついた時にはモニターが全て消えて操縦席は真っ暗になって

いた。

気を失ったわけではなく、ほんの数秒のことだ。不意にギリギリと金属が擦れ落ちる音が響いた。巨大なドムの鉄塊は、ムサイの艦橋から崩れ落ちると甲板を突き破って止まった。

そして、最後に、ドムの左腕が私のザクの『ふくらはぎ』を掴んで、沈黙した。

これで終わった。

私が、ザクのキャノピーをこじ開けてカメラのシャッターを切る頃には、守備部隊が敵の歩兵に反撃し、上空では隊長が指揮する中隊も降下を始めていた。

戦闘はまだ、ムサイの甲板やハッチで続いていたが、鎮圧される予感があった。

ソロモンの日々(1)

暗殺計画は、未遂事件として収束した。

それでも百名近くの死傷者が出て、ソロモン始まって以来の大損害になってしまった。

今回の事件は、対外的に『連邦が送り込んだ作業者と民間人協力者による宇宙港の襲撃』と報道され、ドズル中将一家を狙った暗殺事件だったことは、本国にもソロモン内部にも伏せられた。

事件の一週間後には、宇宙港の警備主任が容疑者の汚名を来たまま獄中で死んで、一応の決着を見ることになった。

なぜムサイの来港予定を知っていたか、なぜモビルスーツを奪われたのか、という疑問は、不幸な警備主任に押しつけられた。死人に口なし、スケープゴート。

そして事件後、マティが実行犯に最も近いと断言したグレン少将は、地球圏への増援のため出撃して行った。

キシリア・ザビの要請に基づいて。

「……で、少尉の昇進は無いですか？」

「まあね。敵を倒したわけではないから」

私とミカサは、宿舎で間食しながら歓談できる生活に戻りつつあった。ステイックにチョコレートをコーティングした菓子が次々無くなっていく。

ミカサは、ライカの限界を無視した急加速の影響で、首の筋違いと肺圧迫の治療のため入院したが、五日後には自室療養を医師から許された。そして、私への事情聴取も昨日で終わった。

「だって、少尉がうまく立ち回ったおかげで、連邦のシンパだとか
作業員を全滅できたんですね？ ついでに悪いことを考えていた
連中に打撃を与えた。それなら、おかしいですよ。昇進無しなんて」
確かに要塞保安部は、事件に荷担した犯人一味を四十名近く射殺、
もしくは拘束した。それに私の気まぐれで「スパイ狩りがある」と
連邦へ情報をリークしたこともあって、事件前に出国者が多数いた
ようするに、この事件で実行役を、殺すか、捕らえるか、逃がすか
できたため、合計で三百人程度の不穏分子をソロモンから追い出し
たことになる。この規模の要塞では、根絶やしにしたと言っている
人数である。

もしもマティが、暗殺計画の阻止でなく、ソロモンの不穏分子排
除を狙っていたとしたら大したものだと思う。

「でもね、昇進とかよりも、私が軍法会議に掛けられなかったこと
の方が奇跡なんだよ。訓練中に、たまたまスコープで宇宙港を見て
いたら暴動が発生していて、模擬弾しか携帯していなかったので殴
り込みに行った。こんな言い訳が信じられるなんておかしいんだ。
これは、誰かが弁護してくれたとしか思えないよ」
「じゃあ、わたしもその弁護士さんに感謝ですね」
ミカサは無邪気に笑った。

私は、その弁護士を知っている。
ドズル中将だ。

私自身、中將を囮にした計画に携わっているので、ばれてしまっ
たら処罰される立場だ。

だからこそ、弾を使い果たした後は演習の終了時間に何食わぬ顔
で戻ってやり過ごす計画だったが、私は二機目のドムを撃ち漏らし
た勢いで、突撃してしまった。

自分の命が大事なら絶対に動いてはいけなかった。それでも、ラ

イカを動かしたのは、ムサイの艦橋で泣いている赤子を見てしまったからだ。もし、あそこで赤ん坊を見殺しにしていたら、私は私ではなくなっていただろう。

まあ、結果的には、リックドムを破壊したことで疑われずにすんだ。

ドズル中将の目の前で、旧型機で反乱リックドムを叩き潰した事実は美談にされ、褒め称えられたからだ。そのお陰で余計な追求をされることはなかったのだ。

結果論だが、あの時突っ込んだのは正解だったのかも知れない。計画通りに終えていたら、謎の狙撃はスナイパーである私の仕事として嫌疑を掛けられただろうから。

疑わしきは罰する世の中なのだ。

いつの間にか、宇宙港のゲートとドムの爆発は、狙撃ではない別の解釈なされていた。

ソロモンの日々（最終話）

「あ、そうだ。守衛のカワベ曹長が激的なアプローチを君にしているそうだが、どうなのかね？」

元女優で美女のミカサは、はにかみながら「なんで知ってるんですかあ？」と嬉しそうに応じた。

そりゃ知っている。

お前の霞もない姿を写真に収め、彼に送ったのは私なのだから。火に油を注げば炎上するに決まっている。

「でもでも、いきなり「結婚して下さい！」はないですよ。少尉はどう思います？」

「……あいつの実家を知っているか？」

「いいえ？」

私は首を捻った相棒に教えてやった。

「あいつの実家は財閥系放送局を営んでいる」

「……マジッスか」

「マジだ……」

女優の目が光るのを私は見た。

「どうやら、カワベに私の『名言』をプレゼントする必要が生じそうだ。」

『赤ん坊を孕ませて除隊させる』

戦争に恋人と従軍しても仕方がない。どうせ、長続きしない戦争だ。懲罰を食らってでも、軍から抜けた方が賢い。

ちなみに、私の歴代パートナー1と3は『出来ちゃって除隊』をしてしまった。私が作った秘密のトンネルを勝手に使って、複座のザクを三人乗りにしてしまったのだ。

「デートに使い。今回の礼だ」

ミカサに指輪を投げてやる。

「うわぁ、綺麗ですね。ありがとございますー」

「宝石は人造だが、粹の方に価値があるんだ。まあ、リングごと大事にしろ」

本当は宝石が本物で粹の五万倍の価値がある。スターエメラルド。金に換えれば老後は楽だが、石を金に換えるとおろくなことが起きない。

私にはそんな妙なジンクスがある。私は験を担ぐ方だ。

「先輩のパートナーになると幸せになるってのは本当ですね」

「あんたらが幸せを攫っていくから、私はオケラだよ」

ミカサが笑った。

だが、今回の事件は思うことが多かった。

徹底して連邦と争わなくてはいけないのに、身内の情報をリークする勢力。その勢力を潰すために、危ない綱渡りをする対抗勢力。

こんなんじゃ、長続きしない。

もしかしたら、リックドムに乗っていたパイロットには、この大戦の行く末が分かっていたのかも知れない。

私が叩き潰したドム。

奴は、左腕だけ使って、ムサイの艦橋へ向かっていた。あの時は、ジャンプするためのバーニアが破損したから、ああいった行動をしたと思っていた。ジャンプすれば、私が追いつく間もなくムサイの艦橋を子供もろとも潰していただろうから。

だが、検証の結果バーニアは使用出来たという。

そして、あのドムには連邦の『ヘビ』が乗っていた。

あいつは……あの、ふくらはぎフェチは、私を守ると言っていた。もしかしたら、彼は私が突撃したから死んでくれたのかも知れない。あの局面に陥ると、私が生き残る条件は、何らかの功績を立てるしかないから。

けど、理由は？

ジオンを憎んでいたヘビが、ジオンの女を助ける理由は？

「……一目惚れ……とか？」

「何か言いました？ 先輩？」

「いや。独り言」

私は苦笑した。そんなことはあり得ない。

「それはそうと、先輩。おめでとうございます」
ミカサが深々と頭を下げた。

「まさか、あの最中に写真を撮っていると思いませんでしたよ」
机の上には今日の新聞が置かれている。

一面には『ソロモンで家族との再会を喜ぶ司令官』という見出しが写真と共に載っていた。

それは私がスコープを通して撮影した写真だ。
豪快にゼナ婦人とミネバ様を抱くドズル中将。

昨日、中将から勲章の授与をされた時、直接その写真を渡すと豪快に喜んでくれた。

その顔はスナップ写真に喜ぶ、ただの父親だった。

「まさか、先輩の目的ってのが写真撮影だと思っていませんでした

よ。しかも、その写真を撮るためだけに、危険な任務を志願したなんて、呆れてしまいます」

「言っただろ。私はスナイパーである前にカメラマンなんだって」
ミカサが紅茶を注ぎ足してくれた。

要塞の中での平和な日常。

遠くない未来、戦争は終わるだろう。

何億人と死んだこの大戦は、いずれ歴史のページになってしま
うに違いない。

しかし、そこに個人の姿はない。あるのは指導者が巻き起こした
不快な出来事だけだ。

だけど、写真ならば伝えられることがある。

全ての人間が狂気に狂っていたのではないことを。

人間らしい感情があったことを。

私がそこにいたことを。

きっと、私のカメラに詰まっている未現像のフィルムは、いつか
意味のあるものになるだろう。

そう信じたい。

ソロモンの日々（最終話）（後書き）

ご購入ありがとうございました。

また、お目に掛かる機会がありましたら、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1266m/>

機動戦士ガンダム ~ソロモンの日々~

2010年10月8日12時05分発行